

東京同窓会



月島機械社長 **山田和彦**
やまだ かずひこ

生まれ故郷、北海道室蘭を離れてから半世紀がたつ。昔ほど帰省する機会は少なくなったが、今も故郷を想う気持ちは変わらない。

わが母校、室蘭清水丘高校は、内浦湾の潮風香る景勝地に校舎を構える。地域では進学校の一つに数えられ、ゆえに道内外に多彩な人材を輩出してきた。卒業生の結び付きも強い。同窓会組織は室蘭と東京にそれぞれ存在し、東京同窓会では一三〇〇名の会員数を誇る。

その東京同窓会だが、縁あって二年前から会長職を拝命している。歴代の会長は各界で活躍された方々ばかりで、お引き受けするのをためらったのだが、今は自分の持ち味を出しつつ楽しく職責にあたりつつある。

同窓会には五〇名からなる幹事役がいて、年に一度の祭典である総会をはじめ、さまざまな行事の企画運営を担う。幹事役の中心は元氣いっぱいの子二代だが、働き盛りの若手世代に妙齢のご婦人、はたまた八〇歳を超えるご長老を交え、世代を越えた願ふれだ。

この幹事役、総会の会合以外にも何がしかの理由をつけて集まり、親睦を深めている。基本的にどの

会合でも、言ったもの勝ちよろしく、ほとんど議論がまとまらない。本来、私がまとめ役を担うべきなのだろうが、侃々諤々中は何を言っても無駄なので、愉快に傍観しながら成り行きに任せている。

会合後の懇親会（飲み会）は、さらに話が盛り上がる。健康ネタに始まり、息子娘ネタ、時事ネタなど話題に事欠かない。普段の仕事では左脳中心の生活であるが、同窓会においては完全に右脳中心の時間である。このギャップが楽しいし、ストレス発散にも一役買っている。私にとってはかけがえのない時間だ。

そもそも同窓会というのは、青春の一ページを同じ学舎で過ごしたことを唯一の縁として人が集い、社会生活のしがらみから離れ、世代も立場も越えて心の憩いと潤いを得る場である。加えて、故郷を離れて都会暮らしが長くなっても、人というのはいつまでも生まれ育った場所を背負って生きていくのだと思う。そういう誰しもが持ち得る望郷の念を交わす場としても、同窓会の役割は大きい。

そんな東京同窓会も、一昨年四〇周年を迎えた。諸先輩方が築き上げた同窓会の歴史を駆伝の糧のごとく、次世代につなげていきたい。